

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381257

研究課題名(和文) 小学校における連句・俳句の創作活動に基づく認知的内面化モデルの作成と教材開発

研究課題名(英文) Creating a model of cognitive internalization based on creative activities involving the composition of renku and haiku in elementary schools, and the development of related teaching materials

研究代表者

迎 勝彦 (MUKAE, KATSUHIKO)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：50303194

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中世以来の伝統文化である「連句」「付け句」を小学校国語教育における新たな素材として用いることを目的として、高学年を対象とした授業設計と教材開発を行った。実験的な授業の検証を行い、韻文の創作と批評過程における学習者個々の思考過程の内面化モデルを認知論的な視点から仮説的に明らかにした。また、開発した連句系教材の教育現場への適用可能性とその教育的効果についても考察をまとめた。

研究成果の概要(英文)：This study seeks to use chain-linked verse (renku) and linked couplets (tsukeku), which have been a part of traditional Japanese culture since the medieval period, as a new type of teaching material for Japanese classes in elementary schools. Learning effects were verified using lesson designs for elementary school-aged children. Then, we analyzed the thought processes of individual students during the creation of verse and in the process of critique to clarify these from a cognitive standpoint. In addition, we analyzed the application of the resulting chain-linked verse teaching materials in educational settings to summarize with a discussion of the educational effect of the teaching materials.

研究分野：社会科学

キーワード：連句・付け句 韻文教材 教材開発 国語科教育学 学校現場との連携 内面化モデル

1. 研究開始当初の背景

(1)中世以来の伝統文化である「連句」「付け句」を小学校における国語教育の新たな素材として用いることを提案し、国語表現力を育む支援方法を構築するため、4年計画で調査・研究を行った。

本研究では学習指導要領で重視される「伝え合う力」を身につけるための表現教材として、従来から用いられている俳句・短歌に加え、複数の詠み手からなる連句・付け句による授業手法の確立について研究を行い、連句・俳句の創作時及び創作後に、互いの作品にメタ的な批評を加えることにより相互交流をはかることが可能となるような韻文教材の開発を目指した。また、その開発にあたっては、小学校現場の教員の意識について、先行する研究文献を渉猟することで明確にし、認知論的な視点から授業設計に検討・検証を加え、韻文の創作と批評過程における学習者個々の思考過程の内面化モデルを仮説的に提案し、これを学習者把握のための指標とすることの妥当性、有効性を明らかにしようとした。なお、小学校現場との連携・協力体制を築きながら検証授業を実施し、開発した韻文教材の適用範囲やメタ認知をうながすための学習ツールとしての応用可能性を明らかにすることも本研究の目的である。

(2)モノローグで完結する俳句と異なり、連句は、発句(俳句)以下、複数の詠み手によって句を連ね連想して付けていくところが特徴で、想像力を豊かにし、「転じる」ことにその生命がある。「転じる」ことで森羅万象を対象として詠むことが可能となるのである。連句は百韻(100句を連ねる)や歌仙(36句)が代表的な形式であるが、その基本は前句から付け句を連想して転じてゆくことにあり、「付け句」という行為そのものも、一つの文芸形態として認知されている。本研究で「連句」「付け句」をひとまとまりの教材として扱った所以である。寺島は、2007年より「全国高校生付け句コンクール」(豊田市文化振興財団・桜花学園大学主催)の企画運営に携わってきた。応募句も全国から1万5千を越え、国語教育の一環として多くの高等学校で取り込まれるようになった(2016年に終了)。この選考、運営から教材開発のヒントを得た。

学習指導要領の改訂に伴い、「生きる力」の育成に国語がどのように関わっていかれるかが問題にされている。笑い・時事批評、恋愛事情など、あらゆる事物・現象を対象とし、自在に転換しながら表現世界を織りなしていく連句・付け句を学ぶことで、児童は、多様な対象を形象化する力を身につけることが可能となり、「生きる力」を育むことに繋がると考えられる。

なお、連句・付け句は、俳句より一見高度な文芸に見えるが、俳句より季語の束縛が緩い点、前句という「手がかり」をもとに付け句を案じていく点で、むしろ俳句より創作し

やすいという利点がある。小学生にとっても魅力的な教材となりうると考えられる。

(3)本研究課題に取り組む以前に、寺島は、江戸期の俳諧・俳論の基礎学研究、近現代の俳句・付け句等の韻文表現の国語教育への応用などを試みてきた。科研費「江戸中期の俳諧における連句評点集の総合的研究」(若手研究(B)、2009~2011)等の調査のもと、研究論文「蕉風復興運動と『白砂人集』『去来抄』の上梓を視座に」(『日本文学』vol.61-6、2012年6月)等を発表し、俳論書・式目などの江戸期の俳諧・連句の基礎研究を進めてきた。また、基礎研究で芽生えた問題意識をもとに、俳句教育の論文でも「国語表現としての俳句指導 言語技術の教育を中心に」(蒼穹62号、2003年11月)、「導入期における俳句指導の実践と考察 童話を活用した国語表現活動の試みをもとに」(『桜花学園大学学芸学部研究紀要』5号、2014年3月刊行予定)において、俳句論文の中等教育(高校での実践)での指導理論、俳句授業の問題点、句会の試み等について調査してきた。連句・付け句については、「全国高校生付け句コンクール」に関わる実践授業の一つとして、「付け句を用いた韻文指導の実践と課題 中等教育における授業例を通して」(『桜花学園大学人文学部研究紀要』14号、2012年2月)を発表し、付け句の高校における教材化について予備的な調査研究を行った。一方、迎は、小・中学校における文学作品の読解や話し合い過程における思考過程について研究を行い、ケーススタディを重ねて量的及び質的な分析手法・方法論の構築を試みてきた。本研究との関わりで見れば、科研費「中学校国語科における『話し合い活動』を対象としたメタ認知学習ツールの開発」(基盤研究(C)、2010~2012)や「メタ認知的な意識及び思考を顕在化させるための視点 話し合い活動を対象とした授業研究に関する一考察」(『上越教育大学国語研究』25号、2011年2月)等において、学習活動時の内面活動時に見られる思考過程やメタ的な認知過程に着目した基礎研究及び臨床研究を行ってきた。このような研究準備と問題意識のもと、本研究を構想し、調査や分析を進めていくこととした。

2. 研究の目的

(1)寺島が行ってきた、連句・付け句に関する事業・教育活動、連句の基礎研究の結果を基に、迎が、連句・付け句の国語教材としての可能性を明らかにし、具体的な教材の提供、教材プログラムの開発、創作時及び創作後のメタ的な批評交流活動の内面化モデルを作成し、これに基づく学習支援システムの構築を行うことを目的とした。具体的には、小学校教材としての3つの可能性を明らかにすることを目標とした。

1)他者の出した前句へ付けることにより、双方向性のやりとりが生じ、コミュニケーション

ョン能力を養うことができること。

- 2) 小説・説明文にみられるような因果・説明関係に縛られない詩的表現を味わうことができること。
- 3) 中世以来の連歌をベースにしているため、学習指導要領が重視している「古典に親しむ態度」を自然に身につけることが可能であること。

以上の3つの観点から、連句・付け句の表現教材としての有用性を検証しつつ、「連句」教材のバリエーションとして、中学校を見据えた多様な連句形態の教材化と授業案を提供しようとした。さらに、創作した作品に対し、学習者が互いにメタ的な視点を以て相互交流を深め、創作行為そのものを対象化できるように支援することを目指した。

(2) これまで、連句・付け句研究は、矢崎藍『付け句恋々』(中日新聞社、2004)、深沢真二『連句の教室』(平凡社、2013)など、大学の学生による創作表現としては、すでに、いくつかの実践と報告が見られた。しかし、国語教育への応用を目指したものは、ほとんど見られず、中学、高等学校における実践研究では、宗我部義則「連句であそぼう！新しい定型詩の学習材の提案」(月刊国語教育研究 309、1998年1月)、黒岩淳『連歌と国語教育 座の文学の魅力とその可能性』(溪水社、2013)が見られる程度であった。いずれも、萌芽的な試みであると考えられる。これに対し本研究では、寺島が携わってきた「全国高校生付け句コンクール」などによる高校での実践活動の蓄積をもとに、初等教育における付け句・連句による授業例の先行研究の収集と分析を行い、そのデータを基に、迎が国語教育の立場から、学習指導計画の立案や学習指導案の作成、連句指導教材づくりを行い、相互交流過程に焦点をあてた評価基準を明らかにしようとした。その上で、小学校において実践授業を行い、具体的な授業手法を提案することを試みようとしたものである。寺島が基礎学としての韻文素材とデータを提供し、迎が国語教育のプログラムとして応用的に理論化するという研究手法は本研究の特に独創的な点といえよう。

このような構想をもとに、新教材の開発および教材の妥当性を理論的に相対化することを研究の目的とした。

3. 研究の方法

研究の内容を基礎的研究と実証的研究とに分け、基礎的研究においては、小学校高学年から中学校段階までを視野に入れた連句系教材の導入に関する段階・系統性を仮定的に措定し、小学校高学年段階を対象とした新教材の開発を行うとともに、その理論的枠組みの構築をはかる。その上で、国語教育的な観点から検討を加え、学習ツールとしての教育的意義や効果を仮説的に明らかにする。とくに研究初年は、教材の開発及び授業研究における本テーマに関わった先行研究を収集

するとともに、それらの検討を行い、研究課題を明らかにする。平成27年度以降は、教材開発を引き続き行いながら、検証授業実施に向けた授業手法の確立と授業分析システムの構築をはかる。

実証的研究においては、開発した連句系教材の教育現場への適用可能性を検証するとともに、教材開発に至るまでの手続きを明らかにする。また、認知論的な視点から授業設計に検討を加え、韻文の創作と批評過程における学習者個々の思考過程の内面化モデルを仮説的に提示し、これを学習者把握のための指標とすることの妥当性、有効性を明らかにする。連句系教材の教育場面への適用可能性の検討(臨床的検証)を質的分析的手法に基づいて行い、小学校高学年段階における「付け句」の創作時及び創作後における相互交流のあり方、実際の支援・指導方法についての理論化をはかる。

4. 研究成果

(1) 年度ごとの研究の概要

平成26年度は、理論的枠組みの構築を行い、「連句」「付け句」を小学校国語教育における新たな素材として用いることの可能性とその教育的効果の検討を行うとともに、学校現場との連携・協力体制を築きながら検証授業の構想を行い、授業プラン構築の段階から学習活動時の認知過程把握のための方法論を明らかにした。

平成27年度は、授業手法の確立と教材開発に関する仮説的な提案を行うことを目的とし、「連句」「付け句」の教材化に関する理論的枠組みの構築と開発した連句系教材の有効性の検討を行うとともに、考案した授業手法及び開発した連句系教材を実際の授業場面に適用した(本研究で開発した連句系教材を用いた授業手法の教育現場への適用可能性の検証を目的として、小学校高学年児童を対象とした授業を平成27年11月に愛知県内の公立小学校において実施した)。

平成28年度は、授業分析システムの構築と授業記録(発話記録)及びインタビュー記録(内観報告)のデータ化を行い、授業分析に基づく連句系教材の教育現場への適用可能性について検討を加えるとともに、韻文の創作と批評過程における思考過程の内面化モデルの作成を行い、授業手法の仮説的提案を行った。

平成29年度は、小学校において実施した検証授業(本研究で構築した理論の検証)により得た事例分析に基づきながら、「連句」「付け句」を小学校国語教育における新たな素材として用いることの可能性を明らかにした上で、特に創作時における学習活動の認知的側面からの分析を行い、仮説的にモデル化を試みた。

(2) 本研究の総合的成果

中世以来の伝統文化である「連句」「付け句」を小学校国語教育における新たな素材と

して用いることを研究の目的として、以下の1)～5)の手続きを踏まえながら、小学校高学年段階を対象とした授業設計を行い、その学習効果を検証した。その上で、韻文の創作と批評過程における学習者個々の思考過程を分析し、認知論的な視点から明らかにした。

1) 先行研究の収集・整理及び検討

小学校高学年段階における「付け句」の創作時及び創作後における相互交流のあり方、実際的な支援・指導方法について理論化をはかるとともに、連句系教材の小学校教育現場への応用可能性を検証する上で必要となる先行研究を収集し、小学校における表現教材としての有用性について検討を加えた。

2) 検証授業実施に向けた学校現場との連携・協力体制の構築

「連句」「付け句」といった古典俳諧を小学校段階において教材化する際の課題や問題点を探り、その応用可能性を明らかにすることをねらいとするために、27年度中に検証授業を実施することとした。そのための教材化研究及び教材開発を行うとともに、公立小学校との連携、協力関係作りを行った。

3) 検証授業の実施と授業記録等のデータ化

愛知県内の公立小学校において、本研究で開発した連句系教材を用いた検証授業を実施し、収録を行った。本研究で考案した授業手法及び開発した連句系教材の教育現場への適用可能性やその効果を検証することを目的として、主として学習者及び授業者の発話記録の作成と内観報告（質問紙への回答、刺激回想記録等）の収録を目的としたデータ収集を行った。録画機器による授業記録及びインタビュー記録については、分析及び研究発表のためのデータ化を行った。

4) 検証授業の分析と連句系教材の教育現場への適用可能性の検証

小学校高学年段階を対象とした検証授業をふまえ、「連句」「付け句」を小学校国語教育における新たな素材として用いることの可能性とその教育的効果について検討を加えた。まず、学習活動の認知的側面からの分析と連句系教材の小学校現場への応用可能性の検証を行い、小学校高学年段階での「付け句」創作時における学習活動の実態を学習者の認知的側面に着目してモデル化するとともに、実際的な支援・指導方法を提案するための理論的な枠組みを明らかにした。次に、開発した連句系教材の教育現場への適用可能性を質的な手法を用いて検証するとともに、見込みから句作への三段階を具体化することの学習効果とメトニミー、シネクドキー的な用法が学習者の認知活動に認められたことを明らかにした。連句創作の過程において「付け句」に着目することの意義を検証しつつ、特に趣向<散文化>の部分の教材化を提案することで、付け句の創造性を論じるとともに、散文と韻文とが表裏の関係にあることに気づかせる上で有益な素材になることを指摘した。

5) 韻文創作時における思考過程の分析と内面化モデルの検証

公立小学校において実施した検証授業を対象に、「付け句」創作時における学習者の思考過程を分析した結果、創作活動が「見込み」から「句作」への三段階を経ること、さらに「趣向」から「句作」の段階における認知処理がおおよそ三つのパターン（散文化する中で印象的な言葉を切り取り句作する、散文を要約・抽象化する形で句作する、散文化した内容をさらに敷衍し、展開的に句作する）に分かれることを明らかにした。この過程をモデル化するとともに、メトニミー、シネクドキー的な用法が学習者の認知活動に認められたことを明らかにすることにより、「趣向」（散文化）の部分の教材化の可能性と、これを重視した指導方法を提案するための理論的な枠組みを明らかにした。

本研究において開発した連句系教材は、「付け句」創作の過程において、創作した作品に対して学習者が互いにメタ的な視点を用いて相互交流を深め、創作行為そのものを対象化し、自己評価や相互評価するための媒材として機能していたととらえることができる。とくに、抽出した事例からは、付け句の創作時及び創作後に、互いの作品にメタ的な批評を加えることにより学習者同士の相互交流がどのように実現しているか、さらにはその過程において学習者の内部にどのような思考活動が営まれているのかについての認知的な営みが認められる。こうした学習者の内的過程把握のための学習ツールとしての活用の方途やその有効性について一定の示唆を得ることもできた。

(3) 今後の課題

本研究では、研究の独自性を、学習者の実態調査及び授業分析から得られたデータを重視して連句系教材を開発するという点に求めた。その上で、認知論的な視点から考案した授業手法に検証を加え、韻文の創作と批評過程における学習者個々の思考過程の内面化モデルを仮説的に作成し、これを学習者把握のための指標とすることの妥当性、有効性を明らかにするための検討を行った。とくに、創作した作品（あるいは創作途中の作品）に対し、学習者が互いにメタ的な視点を用いて相互交流を深め、創作行為そのものを対象化し、自己評価や相互評価にまで学習活動を展開できるような学習過程を明らかにすることを目的とした。創作した句に対して、学習者が互いにメタ的な視点を用いて相互交流を深めるとともに、創作行為そのものを対象化し、自己評価や相互評価にまで学習活動を展開できるような学習モデルを具体化することを目的としていたが、これについては十分に検討することができなかった。本研究で考案した授業手法の見直し・修正や、開発した連句系教材の見直し・修正をはかりつつ、学習者の認知過程を模した認知的内面モデルの再構築をはかり、メタ認知をうながすた

めのツールとして連句系教材がどのように機能しうるのか、さらには学習教材としての可能性について論をまとめていく必要がある。また、検証授業で得た授業データに基づき、創作と鑑賞とがどのように結びついて学習が進められたのかを分析し、教材としての有効性について検討を加えていくことが求められる。

(4)教育研究における本研究の意義

近年、言語活動の充実を図ることをねらいとして、詩歌、俳句や短歌の学習において創作活動が重視されるようになった。小学校においても、俳句の創作活動がその短さと定型の取り組みやすさから盛んに取り入れられ、指導法の開発と理論化において一定の成果も示されている。本研究では、こうした俳句、短歌に加え、「連句」「付け句」の創作活動に着目し、表現教材として「付ける」活動の意義について検討し、見込みから句作への三段階を具体化することの学習効果とメトニミー、シネクドキー的な用法が学習者の認知活動に認められたことを明らかにした。連句創作の過程において付け句に着目することの意義を検証しつつ、特に趣向<散文化>の部分の教材化を提案することで、付け句の創造性を論じるとともに、散文と韻文とが表裏の関係にあることに気づかせる上で格好の素材になることを指摘した。多くの要因が複雑にからみ合っているために、創作・批評時における認知過程の正確な把握は容易ではないが、表現と理解、韻文と散文との往還の様相を明らかにしながら、学習者の思考の内容や授業事象の発現に至る要因を解明し、授業そのものの特徴や一定の傾向を明らかにすることができれば、教育研究としても有益な手がかりを得ることができると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

迎 勝彦、寺島 徹、小学校における付け句創作指導の可能性 - 趣向と句作に基づく教材化への視点 -、解釈、査読有、63巻、2017、pp.11-19

寺島 徹、加藤 国子、導入期における俳句表現の指導方法について - 句会をめぐる教師の添削方法をもとに -、桜花学園大学保育学部研究紀要、査読無、13号、2015、pp.115-127

寺島 徹、樋口 敦士、江戸期の散文作品の教材化と協調学習に関する考察 - ジグソー法を用いた西鶴教材の実践授業をもとに -、桜花学園大学保育学部研究紀要、査読無、13号、2015、pp.129-148

寺島 徹、樋口 敦士、小学校における「話すこと・聞くこと」の力を育むためのグループ学習の考察 - 質問力をつけるための「水平思考ゲーム」の教材化をめぐる -、桜花学園大学学芸学部研究紀要、査読無、6号、2015、pp.49-63

〔学会発表〕(計1件)

寺島 徹、連句系教材による授業実践の現状と課題、早稲田大学国語教育学会第275回例会、2018年4月21日、早稲田大学早稲田キャンパス14号館102教室(東京都・新宿区)

〔図書〕(計3件)

寺島 徹 他、溪水社、ことばの授業づくりハンドブック 中学校・高等学校 文学創作の学習指導 実践史をふまえて、2018(刊行予定)、272(pp.134-150)

迎 勝彦 他、上越教育大学出版会、「思考力」が育つ教員養成 - 上越教育大学からの提言3 -、2018、272(pp.15-19)

迎 勝彦 他、上越教育大学カリキュラム企画会議、教科内容構成特論「国語」、2017、66(pp.15-23)

6. 研究組織

(1)研究代表者

迎 勝彦 (MUKAE, Katsuhiko)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：50303194

(2)研究分担者

寺島 徹 (TERASHIMA, Toru)

金城学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：30410880